

南房総市若宮横手遺跡

—独立行政法人緑資源機構安房南部区域における農業用道路工事埋蔵文化財調査報告書—



平成19年1月

独立行政法人 緑資源機構

財団法人 千葉県教育振興財団

序 文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的とし、昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第573集として、独立行政法人緑資源機構による安房南部区域における農業用道路工事に伴って実施した南房総市若宮横手遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、縄文時代から中世にかけての土器が出土するなど、調査例の少ない安房地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られています。この報告書が学術資料として、また地域の歴史解明の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様にご心から感謝の意を表します。

平成19年1月

財団法人千葉県教育振興財団
理事長 岡野孝之

凡 例

- 1 本書は、独立行政法人緑資源機構による安房南部区域における農業用道路工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県南房総市白浜町白浜字鴨田横手4317-2ほかの所在する若宮横手遺跡（遺跡コード 234-001）である。
- 3 発掘調査から報告書刊行に至る業務は、独立行政法人緑資源機構の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団が実施した（委託業務名 18安房 埋蔵文化財調査業務）。
- 4 発掘調査および整理作業は、調査研究部長矢戸三男、南部調査事務所長高田 博の指導のもと、上席研究員麻生正信が下記期間に実施した。
発掘調査 平成18年09月19日～平成18年09月29日
整理作業 平成18年12月01日～平成18年12月28日
- 5 本書の執筆・編集は、上席研究員麻生正信が担当した。
- 6 発掘調査から報告書刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、独立行政法人緑資源機構安房南部建設事業所、南房総市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地図は、下記のとおりである。
第1図 国土地理院発行地形図「白浜」[千倉] 1/25,000
第2図 南房総市役所（旧白浜町）発行都市計画図 1/5,000
第3図 独立行政法人緑資源機構発行白図 1/500
- 8 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による昭和42年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位は、全て座標北である。測量座標値は日本測地系である。
- 10 本書で使用した遺構番号等は、基本的に調査時の番号を踏襲した。

本文目次

I はじめに	1
II 遺跡の位置と周辺の環境	1
III 調査の成果	3
1 調査の方法	3
2 基本層序	3
3 出土した遺物	5
IV まとめ	8
報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 1/25,000	2	第5図 出土遺物 (1)	6
第2図 遺跡周辺地形 1/5,000	3	第6図 出土遺物 (2)	7
第3図 確認調査トレンチ配置図 1/1,000	4		
第4図 2トレンチ土層断面図・トレンチ土層柱状図	4		

表目次

表1 周辺遺跡一覧表	2	表2 土製品観察表	8
------------	---	-----------	---

図版目次

図版1 1 若宮横手遺跡周辺航空写真、 2 遺跡遠景	5 5トレンチ全景、6 6トレンチ全景、 7 9トレンチ全景、8 7トレンチ全景
図版2 1 1トレンチ全景、2 2トレンチ全景、 3 3トレンチ全景、4 4トレンチ全景	図版3 出土遺物 (1) 図版4 出土遺物 (2)

I はじめに

平成7年3月、農林水産省に千葉県知事より安房南部区域の農用地整備事業（区画整理・農薬用道路）採択の申請があり、これを受けて、農林水産省は平成11年2月に事業実施方針の指示をした。平成13年8月から10月にかけて、当時の緑資源公団が事業を実施することとなり、千葉県知事と事業実施について協議を行った。この中で安房南部区域の農用地整備事業計画に伴い、当該区域の埋蔵文化財の所在の有無及び取り扱いについて千葉県教育委員会に照会をした。千葉県教育委員会は白浜町教育委員会の協力を得て、遺跡の所在の有無の踏査を実施し、遺跡が所在する旨回答した。

国の行政機関の統廃合によりその後、独立行政法人緑資源機構が事業を引き継ぎ、当該地域に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて千葉県教育委員会と協議をした結果、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県教育振興財団が、発掘調査及び整理作業を実施することとなった。

II 遺跡の位置と環境

本調査地は、南房総市白浜町白浜字鴨田横手4317-2ほかに所在する。

房総半島南端の千倉から館山にかけての海岸線には、背後の房総丘陵が海へと迫る急峻な旧海食崖とその前面に広がる幅1kmほどの僅かな段丘面が帯状に分布している。この海岸段丘は、海水面付近に形成された海食台が、地震による隆起で陸地化したものと考えられている。海岸段丘はひな壇状に4面形成され、「沼面群」と呼称されている。地質学では地層中の貝化石のC14年代から、過去の地震の発生時期を6,150年前（沼Ⅰ面・標高23～26m）、4,350年前（沼Ⅱ面・標高16～21m）、2,850年前（沼Ⅲ面・9～14m）、273年前（沼Ⅳ面5～6m）と推定している。元禄16年（1703）の大地震では、野島崎が島であったものが半島状に繋がり、大正12年（1923）の関東大震災では岩礁地帯となるほど隆起している。

若宮横手遺跡は、標高16～25mの段丘面状に展開し、沼Ⅰ・Ⅱ面上に位置する。調査区内の最上位面は、標高23～25m、次面は21～22m、最下面は19～20mで3面を確認することができた。

南房総市白浜町は、房総半島の南端にあり、古来より、三浦半島、伊豆諸島、及び常陸・東北方面への海上交通の要衝の地として重要であった。このことは、昭和62年に調査され、4世紀中頃から5世紀初頭を中心とした手捏土器や石製模造品（剣形、有孔円盤・勾玉・白玉）が出土し、海のまつりが想定される祭祀遺構が検出された小滝涼源寺遺跡の様相からも想定される。

本遺跡の周辺には、多数の遺跡が存在する。旧石器時代では、ローム層堆積が認められ、黒曜石片が採取された滝山遺跡(16)が存在する。縄文時代では、早期燃糸文土器が採取された花立遺跡(15)、泉遺跡(18)が存在する。他に、中・後期の土器が採取された長越北遺跡、長越南遺跡、滝口遺跡、見上遺跡、鴨田桜井遺跡(12)が存在する。滝口遺跡には地点貝塚が存在し、滝口貝塚、長尾貝塚などと呼ばれ、明治期より昭和30年代にかけて一部調査が実施され、縄文時代前期（諸磯・黒浜・十三菩提）・中期（阿玉台・勝坂・加曾利E）・後期（堀ノ内・加曾利B）の土器が出土している。弥生時代では、弥生土器が採取された花立遺跡(15)、大畑遺跡が存在する。古墳時代では、勾玉出土の伝聞のある西山入口遺跡(4)、昭和62年に調査され、4世紀中頃から5世紀初頭を中心とした手捏土器や石製模造品（剣形、有孔円盤・勾玉・白玉）が出土し、祭祀遺構が検出された小滝涼源寺遺跡(5)、平成13年に調査され、後期の集落跡が検出された

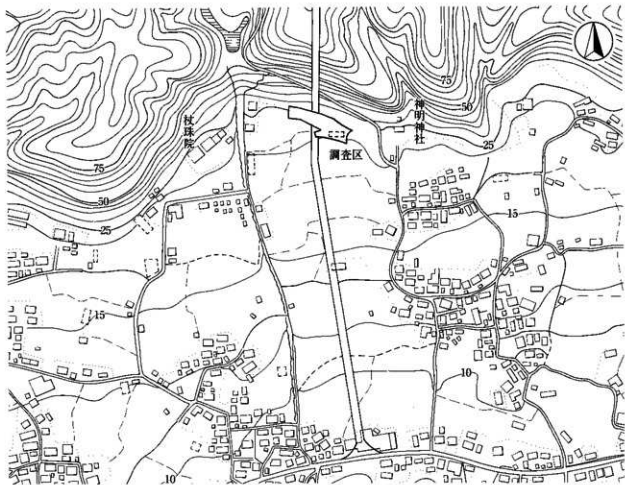
沢辺遺跡(6)、平成11年に調査され、前期から中期の土師器、石製模造品(銅形)が出土した青木松山遺跡(10)、後期土師器(高坏・碗)が採取された細田道下遺跡(11)、前期の土製模造品(鏡・玉)、滑石製白玉、手捏土器などが採取された見上遺跡が存在する。細田道下遺跡(11)は、標高8mと最も低位の遺跡である。奈良・平安時代では、26遺跡と最も数が多い。特に旧白浜町白浜に所在する海岸段丘面上の沢辺遺跡(6)、若宮横手遺跡(1)、大島砂畑遺跡(7)、水洞遺跡(8)、根本遺跡(9)、青木松山遺跡(10)は白浜遺跡群と呼ばれている。やや南に離れて鴨田桜井遺跡(12)、長尾川周辺の段丘面上に花立遺跡(15)、大西遺跡(17)、向原遺跡、旧千倉町寄りの段丘面上に東横手遺跡(2)、明堂遺跡(3)が存在する。中世では、里見氏の初期の居城といわれる白浜城跡(13)、近世では、西春法師入定塚、実浄法師入定塚、近代では、長尾陣屋(14)が存在する。長尾陣屋は、明治元年(1868)7月駿河国藤枝の田中藩から本多正訥が転封され、上総から安房にかけて四万石の領地を与えられたことにより計画された。平成10~12年に(財)総南文化財センター(平成16年11月30日解散)が調査し、井戸跡、礎石立建物跡、礎石、段整形跡、道路跡、溝跡、石垣、区画溝跡、整地跡や多くの近世陶磁器、近世瓦、鉄製品が出土した。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/25,000)

表1 周辺遺跡一覧表

1若宮横手遺跡 2東横手遺跡 3明堂遺跡 4西山入口遺跡 5小滝涼源寺遺跡 6沢辺遺跡 7大島砂畑遺跡 8水洞遺跡 9根本遺跡 10青木松山遺跡 11細田道下遺跡 12鴨田桜井遺跡 13白浜城跡 14長尾陣屋跡 15花立遺跡 16磯山遺跡 17大西遺跡 18泉遺跡 19横溝遺跡



第2図 遺跡周辺地形図 (1/5,000)

Ⅲ 調査の成果

1 調査の方法

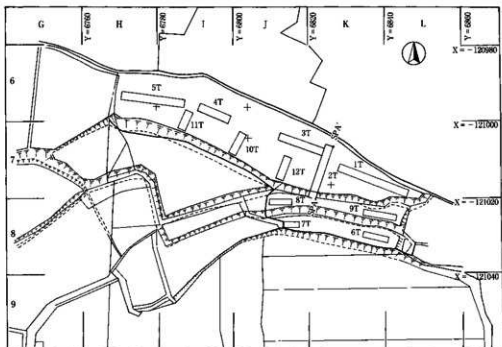
調査地区は、周知の若宮横手遺跡の北側に位置し、海岸段丘面上に三面に渡る。当初は、2,498.09㎡について調査を実施する予定であったが、事業地の一部について、調査が開始できなかつたため、1,700㎡について調査を実施した。当初予定され、調査ができなかつた調査区に隣接する地点にもトレンチを設定したが、遺構の検出が見られなかつたので、未調査区の追加調査は不要と判断された。

周知の遺跡範囲に網掛けをし、遺構の検出地点・遺物の出土地点を明確にするため、調査区内を20m方眼の大グリッドに分け、南北に北から1～10～、東西に西からA～K～とグリッド番号を割り振った。さらにその中を2mの小グリッドに分割し、北から00～90、西から00～09とグリッド番号を割り振った。

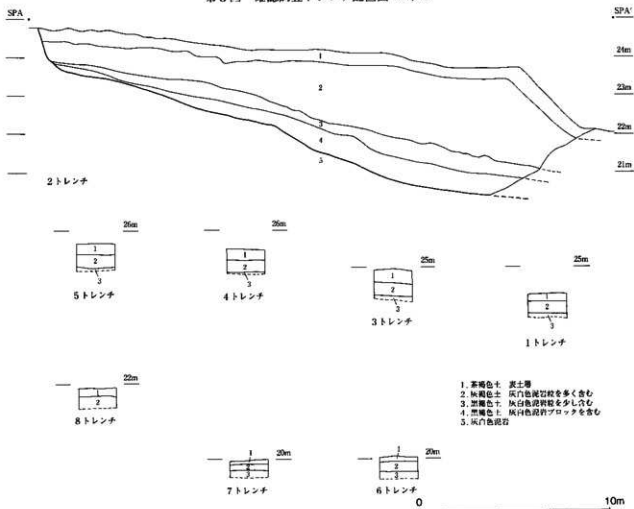
発掘調査は、平成18年9月19日より開始し、トレンチ法により当該区域内の確認調査を実施した。遺構・遺物を確認するため、12本のトレンチを設定した(第3図)。その結果、トレンチ内より遺物は確認されたが、遺構は確認されなかつた。トレンチ内の土層を観察・記録し、遺物を取り上げ、平成18年9月29日にすべての現地作業を終了した。

2 基本層序(第4図、図版2)

調査区は海岸段丘により三面の平坦面があり、それぞれの形成された時期が相違すると考えていた。遺



第3図 確認調査トレンチ配置図 (1/1,000)



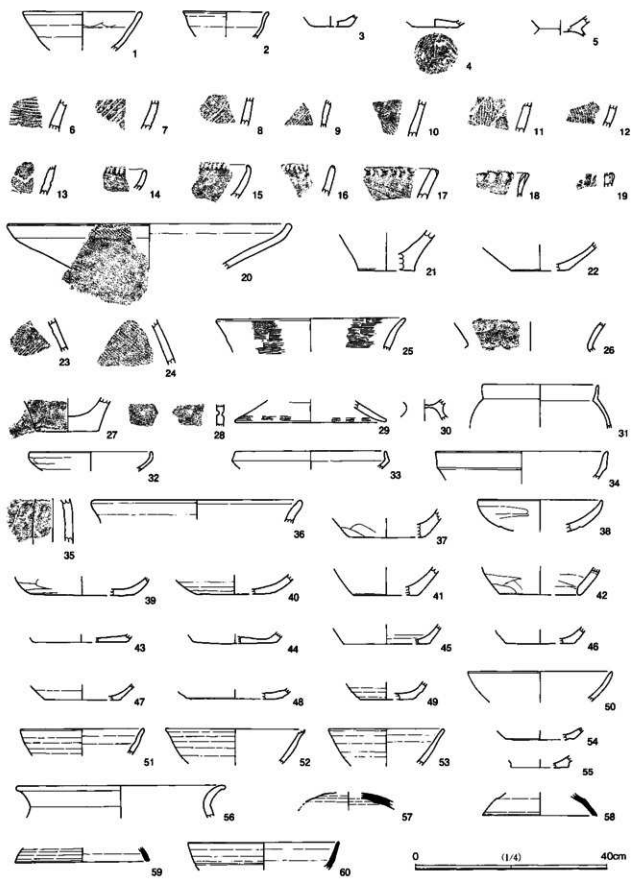
第4図 土層断面図・土層柱状図 (1/100)

構の有無及び遺物の有無、時期を確認するため、調査区内にトレンチを設定した。トレンチは調査区が海岸に平行して東西に長いので、等高線に平行に設定した。地層の堆積状況確認のため、2トレンチのみ等高線と直交して設定し、各トレンチ内の土層の観察記録を行った。2トレンチの土層観察からは、1層は表土層で、30cmほどの茶褐色土がほぼ水平に堆積していた。下位の2層は灰褐色土で、50~200cmと斜面に斜めに堆積し、上部から崩れた地山層である灰白色泥岩粒を多く含んでいた。3層は、黒褐色土で、20~50cmと斜面に斜めに堆積し、灰白色泥岩粒を少し含んでいた。4層は、黒褐色土で粘性が強く15~60cmと斜面に斜めに堆積し、灰白色泥岩ブロックを含んでいた。5層は地山層で、灰白色泥岩層となる。このことから、最上位面は北から南へ下がる緩斜面だったものが、上部からの土砂の堆積により、後世平坦面が形成されたものと考えられる。ほかの1トレンチから12トレンチまでの土層でも、同様な堆積状況が認められた。少なくとも調査区内では、海食台が隆起したような平坦な海岸段丘面がはっきりと確認できなかった。従って、3面認められる平坦面は、後世の耕作により、緩斜面が徐々に耕地化され、平坦面となったものと思われる。

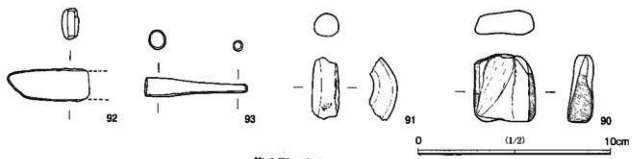
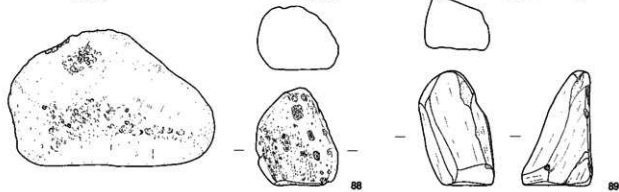
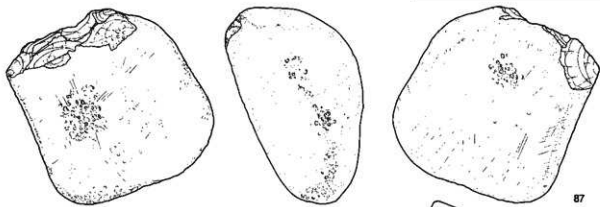
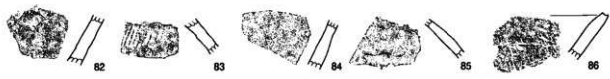
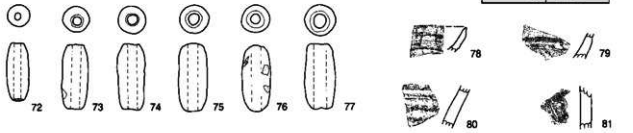
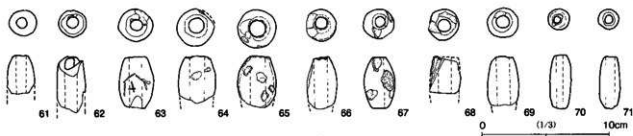
3 出土した遺物(第5・6図、図版3・4)

各トレンチ内からは、遺物が出土している。図示したのは、6トレンチ内から出土したものである。1~5は平安時代土師器である(第5図)。61・62は土錘である(第6図)。

この他、調査区内で採取された遺物について説明する。調査区内で採取された遺物から、縄文時代後期、弥生時代後期から古墳時代前・中・後期、奈良・平安時代、中世にわたり、土地利用が維持されていたことが確認された。6・7は、縄文時代後期加曾利B式の粗製土器の深鉢であろう。8~13は、弥生時代後期の土器で沈線で区画した中に縄文を充填する。14~19は、口縁部で口唇部に刻みが施される。20は浅鉢で、口縁部外面に縄文を施文する。21・22は、弥生土器壺底部である。23~27は、外面にハケメのある古墳時代前期の甕である。28は、内外面から穿孔される途中の土器片である。29は、高杯脚部で大きく外反する裾部である。内外面にハケメが認められる。30は、台付甕底部付近である。31は、古墳時代中期の小型壺で内外面を赤彩する。32~34は、古墳時代後期である。35は、高杯脚部で、外面に沈線を施文する。36・37は、甕である。38~40は、奈良時代土師器である。外面を手持ちヘラケズリする。41は、甕である。42は、甕である。43~48は、土師器である。底部外面を丁寧にヘラケズリする。底径の大きいタイプである。49・50は、土師器である。ロクロ整形後、体部外面を手持ちヘラケズリする。51~55は、ロクロ整形土師器である。55は、円柱技法の底部である。56は、甕である。口縁部はくの字上に外反し、口唇部がさらに外反する。57~59は、須恵器坏蓋である。60は須恵器坏身である。63~77は、土錘である(表2)。63~69は、中間部が太いずんぐりしたタイプで、70~77は、細長いタイプである。78は、灰軸平碗、79は、灰軸大盤、80~82は、常滑の片口である。83~85は、常滑の甕である。78~85の時期は、14~15世紀の所産であろう。86は、沢辺遺跡、青木松山遺跡や鴨川市東条地区遺跡群でも出土し、厚手の口径の大きな「平底鍋形土器」といわれる製塩土器の類と思われる。87は、縄文時代の敲石である。88は、敲石で人為的に整形されている。89・90は、砥石である。89は、泥岩製で研ぎ減りしている。4面とも使用痕が認められる。90は、砂岩製である。3面に使用痕が認められる。91は、土製品で把手の一部分か或いは、勾玉の一部かもしれない。92は、刀子である。93は、煙管の吸い口である。銅製板を丸めて、軋付けして、整形している。



第5圖 出土遺物(1)



第6圖 出土遺物 (2)

表2 土製品観察表

神田	番号	出土位置	遺物名	遺存度	長さ・長径	幅・短径	最大厚	孔径	重量	焼成	胎土	色調
				%	cm	cm	cm	cm				
第6区	61	6トレンチ	土鏝	60	3.10	2.20	2.20	0.80 × 0.90	9.72	良	密	5YR6/4~5YR4/3
第6区	62	6トレンチ	土鏝	80	4.40	2.20	2.20	0.90 × 0.90	12.07	良	密	5YR5/6~10YR4/1
第6区	63	表探2	土鏝	100	4.05	2.60	2.65	0.90 × 0.95	23.51	良	細砂粒を含む	2.5Y7/4~2.5Y5/1
第6区	64	表探2	土鏝	60	3.70	2.90	3.00	1.20 × 1.25	24.38	並	細砂粒を含む	7.5YR7/4
第6区	65	表探2	土鏝	80	4.05	3.00	3.10	1.20 × 1.30	30.27	並	細砂粒を含む	10YR7/4~10YR4/3
第6区	66	表探2	土鏝	90	4.00	2.35	2.55	0.95 × 0.95	20.66	並	長石粒を含む	10YR4/1~10YR5/1
第6区	67	表探2	土鏝	100	4.05	2.40	2.40	0.75 × 0.80	17.96	並	細砂粒を含む	5YR5/8~7.5YR7/4
第6区	68	表探2	土鏝	60	2.90	2.30	2.45	1.00 × 1.00	11.63	並	細砂粒を含む	7.5YR7/6
第6区	69	表探2	土鏝	70	3.80	2.40	2.40	1.00 × 1.00	16.54	並	細砂粒を含む	10YR4/1~10YR7/3
第6区	70	表探2	土鏝	100	4.30	1.65	1.70	0.50 × 0.50	8.39	良	密	7.5YR4/6~10YR7/3
第6区	71	表探2	土鏝	100	4.20	1.60	1.60	0.60 × 0.60	8.47	良	密	7.5YR4/3~7.5YR4/1
第6区	72	表探2	土鏝	100	4.50	1.70	1.75	0.60 × 0.70	10.19	良	密	7.5YR6/6~5YR4/6
第6区	73	表探2	土鏝	100	5.00	2.00	2.10	0.70 × 0.70	16.02	良	密	2.5YR6/8~10YR4/1
第6区	74	表探2	土鏝	100	5.15	2.15	2.15	0.80 × 0.85	17.66	良	密	5YR6/6~10YR4/1
第6区	75	表探2	土鏝	100	5.30	2.20	2.30	0.90 × 0.90	21.32	良	密	7.5YR7/6~7.5YR4/1
第6区	76	表探2	土鏝	100	5.20	2.10	2.20	0.80 × 0.80	15.05	良	密	5YR6/6~10YR4/1
第6区	77	表探2	土鏝	100	5.10	2.40	2.45	1.00 × 1.10	21.24	良	密	10YR7/6~10YR4/1

IV まとめ

今回の調査区は、若宮横手遺跡の中でも北側のはずれにあり、遺物は出土したが、遺構は確認されていない。遺物は、6トレンチから実測可能な平安時代のロクロ土師器片が出土している。他トレンチ内の遺物は図化できなかったが、古墳時代前期～奈良・平安時代の遺物が出土している。

平成10年度に調査された沢辺遺跡の報告から、今回調査区の南側にあたる杖殊院と神明神社の間の平野部において、遺物は出土しているが、遺構は確認されておらず、杖殊院西側と神明神社東側の平野部に遺跡が展開するものと思われる。特に、本調査区より東に600mの神明神社東側地点では、農道建設部分だけの調査であるが、古墳時代前期から奈良・平安時代の竪穴住居跡53棟を含む拠点集落が検出されている。また、本調査区より900m程東には小滝涼源寺遺跡が所在し、4世紀中頃から5世紀初頭を中心とした祭祀遺構が検出されている。当調査区内の遺物も同時期であり、又調査区から採取された遺物は縄文時代後期から中世にわたるもので、調査例の少ない古代安房地域の様相の一端に迫ることができたと考えている。

参考文献

- 朝夷地区教育委員会 1982『千葉県白浜町埋蔵文化財分布地図 史跡・埋蔵文化財包蔵地所在地図』
- 杉江 敬 1999『千葉県安房郡白浜町青木松山遺跡調査概報 -地域開発関連整備(秩序形成)白浜中央地区埋蔵文化財調査業務-』財総南文化財センター
- 畑中博司 2000『千葉県安房郡白浜町青木松山遺跡調査概報2 -地域開発関連整備(秩序形成)白浜中央地区埋蔵文化財調査業務-』財総南文化財センター
- 財総南文化財センター 2000『年報 No11』-平成9年度・10年度-
- 鈴木 昭 2001『千葉県安房郡白浜町沢辺遺跡調査概報 -地域開発関連整備(秩序形成)白浜中央地区埋蔵文化財調査業務-』財総南文化財センター
- 財総南文化財センター 2002『年報 No12』-平成11年度・12年度-
- 神野 信 2003『千葉県安房郡白浜町青木松山遺跡・沢辺遺跡発掘調査報告書 -地域開発関連整備(秩序形成)白浜中央地区埋蔵文化財調査業務-』財総南文化財センター
- 財総南文化財センター 2004『年報 No13』-平成13年度・14年度・15年度・16年度文化財センターのあゆみ-



1 若宮横手遺跡周辺航空写真（昭和42年撮影）（1/12,000）



2 遺跡遠景（南から）



1 1トレンチ全景



2 2トレンチ全景・土層断面



3 3トレンチ全景



4 4トレンチ全景



5 5トレンチ全景



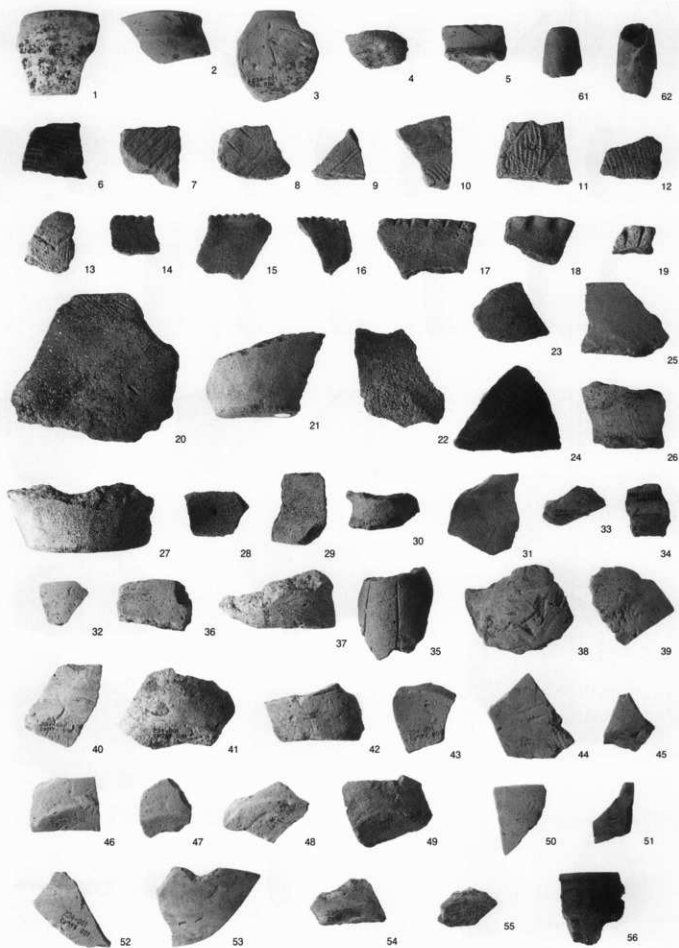
6 6トレンチ全景

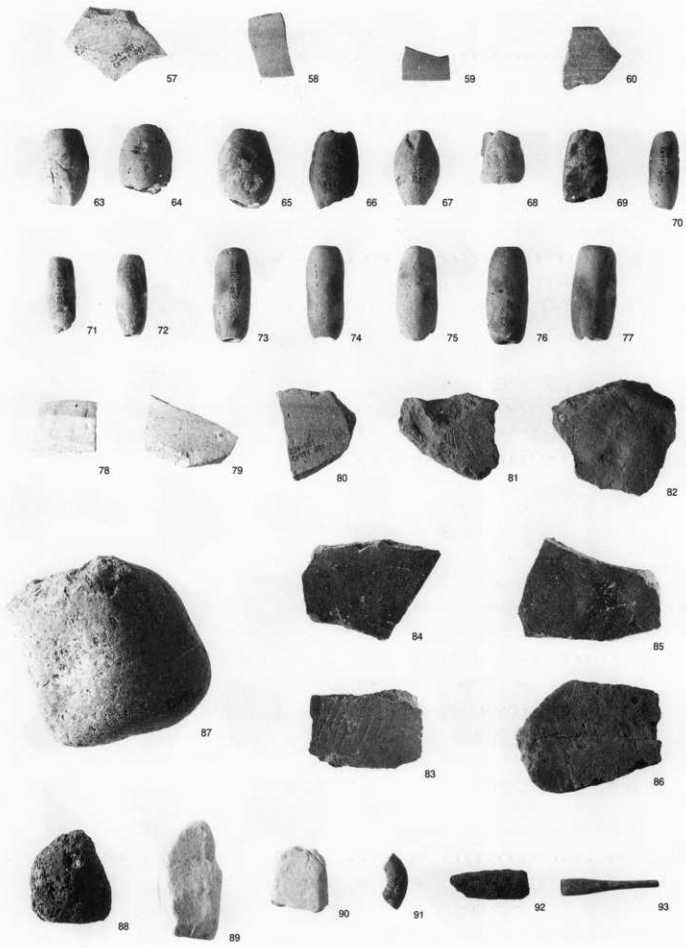


7 9トレンチ全景



8 7トレンチ全景





報告書抄録

ふりがな	みなみほうそうしわかみやよこていせき							
書名	南房総市若宮横手遺跡							
副書名	独立行政法人緑資源機構安房南部区域における農業用道路工事埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第573集							
編著者名	麻生正信							
編集機関	財団法人千葉県教育振興財団 文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL 043-424-4848							
発行年月日	西暦2007年1月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
若宮横手遺跡	南房総市白浜町 白浜字鶴田横手 4317-2ほか	12234	001	34度 54分 32秒	139度 54分 27秒	20060919～ 20060929	確認調査 191㎡/ 1,700㎡	農業用道路 工事に伴う 埋蔵文化財 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
若宮横手遺跡	包蔵地	縄文 弥生 古墳～ 奈良・平安 中世以降		縄文土器、石器 弥生土器 土師器、須恵器、土製品、石製 品、刀子 陶磁器、煙管				

千葉県教育振興財団調査報告第573集

南房総市若宮横手遺跡

—独立行政法人緑資源機構安房南部区域における農業用道路工事埋蔵文化財調査報告書—

平成19年1月31日発行

編 集		財団法人 千葉県教育振興財団 文化財センター
発 行		独立行政法人 緑 資 源 機 構 安房南部建設事業所 館山市安布里230-1
		財団法人 千葉県教育振興財団 四街道市鹿渡809番地の2
印 刷	株式会社	正 文 社 千葉市中央区都町1-10-6